いわき農林水産ニュース

（ふくしまから　はじめよう。「食」と「ふるさと」新生運動ニュース）

12月号　発行　平成25年 12月 26日

〈東日本大震災関連〉

いわき地方の農林畜産物モニタリング調査結果

福島県が行ったいわき地方の１１月の農林畜産物の放射性セシウムモニタリング調査結果をお知らせします。

（表１）農林畜産物の調査結果（１１月末現在）

放射性セシウムが検出されなかった品目と検体数	放射性セシウムが検出された品目と検体数		計
	基準値内で検出された品目と検体数	基準値を超過した品目と検体数	
18品目 51検体	4品目 4検体	0品目 0検体	22品目 55検体

調査した２２品目５５検体のうち、１８品目５１検体は、検査機器の検出限界値以下でした。品目としては、菌床なめこ（施設）、菌床しいたけ（施設）、ハクサイ、キャベツ、ニラ、ダイコン、ヤーコン、カブ、カブ（施設）、リンゴ、フェイジョア、レタス、シュンギク、エゴマ（実）、ギンナン、ジネンジョ、牛肉、原乳の検体すべてにおいて検出が認められませんでした。

(表２)１点も放射性セシウムが検出されなかった品目と検体数

菌床なめこ（施設）　2　菌床しいたけ（施設）　4 ハクサイ 2　キャベツ 1　ニラ 1　ダイコン 2 ヤーコン 1　カブ 2　カブ（施設）　2　リンゴ 2 フェイジョア 1　レタス 1　シュンギク 1 エゴマ（実）　1　ギンナン 1　ジネンジョ 1 牛肉 14　原乳 4

基準値内で検出されたのは４品目４検体で、基準値を超えたものはありませんでした。

（表３）基準値内で検出された品目と検体数

	はちみつ	秋そば	大豆	小豆
検体数	1	4	5	2
検出限界値以下	0	3	4	1
基準値内	1	1	1	1

１１月３０日現在、いわき地方産の農林畜産物で出荷が制限されているのは、表４のとおりです。

（表４）出荷制限及び出荷自粛品目（１１月末現在）

制限、自粛	区分	品目
出荷制限	野菜・根菜・芋類	無
	果物	ゆず
	穀類	クリ
	山菜	たけのこ、ぜんまい、たらのめ（野生のものに限る。）、わらび、こしあぶら
	きのこ	原木なめこ（露地）、野生きのこ
	畜産物	無
出荷自粛	山菜	さんしょう（野生のものに限る。）

また、昨年に引き続き平成２５年産の米についても全袋検査を実施しており、１１月末までの検査点数５１３，７３６点のうち、９９．９６%の５１３，５１２点が測定機器の測定下限値未満、２２４点が基準値内で検出が確認されましたが、基準値を超過しましたものはありません。

（表５）玄米（平成25年産）検査状況（１１月末現在）

	測定下限値未満(<25ﾍﾞｸﾚﾙ/kg)	25～50ﾍﾞｸﾚﾙ/kg	51～75ﾍﾞｸﾚﾙ/kg	76～100ﾍﾞｸﾚﾙ/kg	100ﾍﾞｸﾚﾙ/kg超	計
検査点数	513,512	224	2	1	0	513,739
割合(%)	99.96	0.04	0.00	0.00	0	100.00

調査結果は、福島県のホームページ「ふくしま新発売。」の農林水産物モニタリング情報、平成２４・２５年産米については、「ふくしまの恵み安全対策協議会」で簡単に検索できますので、結果をご確認ください。

〈一 般 情 報〉

「ふくしまからはじめよう。『食』と『ふるさと』新生運動」いわき地方推進本部が設立

１２月１０日（火）、県いわき合同庁舎で「ふくしまから　はじめよう。『食』と『ふるさと』新生運動」いわき地方推進本部設立総会を開催しました。

この運動は、平成２５年３月に策定された「ふくしま農林水産業新生プラン」に即し、農林水産業・農山漁村が東日本大震災及び原子力災害から復興・再生を成し遂げ、以前よりも豊かで魅力ある「ふるさと」を創造し、若い世代に引き継ぐため、生産者だけでなく生産から流通・消費に至る様々な立場の人々が一体となり、その思いと力を一つにして推進することを目的としています。

設立総会には、この目的に賛同してくださった農林漁業者をはじめ、流通業者、商工業者、消費者の各団体やいわき市など機関・団体から３７名が出席しました。

まず、「農林水産業の復興・再生を加速するためには、食の安全・安心の確保と構造強化が重要となる。『新生運動』を推進するために協力していただきたい」といわき農林事務所長があいさつしました。

続いて、いわき地方推進本部の設立と平成２５年度実施計画が議題に上げられたところ異議なく承認され、いわき農林事務所長を本部長とするいわき地方推進本部が設立されました。ここで、ＪＡいわき市の甲髙経営管理委員会長といわき商工会議所の小野会頭が副本部長に就任し、「生産者を始めそれぞれ苦労があるが、前向きに捉えていきたい」（甲髙会長）、「いわきこそ復興の最前線と位置付けてやっていきたい」（小野会頭）とのあいさつがありました。

（いわき地方推進本部を構成する団体の皆様）

その後、休憩を挟んで、生産者、流通業者、消費者の代表者を招いて、推進本部構成員との意見交換会を開催しました。

生産者からは(有)とまとランドいわきの元木専務が、流通業者からは(株)平果の志賀取締役が、消費者からはいわき市消費者団体連絡協議会の蛭田監事が出席され、それぞれの立場で震災前後の変化や現在の課題と取り組みについて話していただきました。それらを基にした意見交換では、生産量や流通量などの回復状況や放射性物質についての疑問、県に対する風評払拭や雇用対策といった要望などがあがりました。

今後の活動としては、「県産農林水産物の安全・安心の確保」、「農林水産業の生産の再生」、「県産農林水産物の風評対策及び消費拡大」、「農林水産業に関する情報発信」の４点について構成団体で協力して取り組んでいくこととなります。意見交換会に出席された皆様からいただいた意見は、いわき地方推進本部のこれからの活動にしっかりと反映させていきます。

（これまでの取り組みを述べる参加者。左から(有)とまとランドいわきの元木専務、(株)平果の志賀取締役、市消団連の蛭田監事）

全国グリーン・ツーリズムネットワーク福島大会開催

１１月１４日（木）から１６日（土）にかけて、第１２回全国グリーン・ツーリズムネットワーク福島大会が開催されました。これは、東日本大震災、原子力災害を経験した福島県において、グリーン・ツーリズム全国大会を開催することによって、福島県の現状を内外に発信し、グリーン・ツーリズムの回復・風評被害払拭等を目指すことを目的としたものです。具体的には、県内外の各地域が抱える課題を共有し、その解決に向け幅広く議論する一方、来県された方には県内のグリーン・ツーリズムの取り組みや本県の復興状況を見ていただくというものです。今大会は、「ふくしまから　はじめよう。～ふくしまの今！つながろうグリーン・ツーリズム～」をテーマとして、１４日（木）は県内８か所で分科会が、１５日（金）は喜多方市で全体会が、１６日（土）は南相馬方面へのオプショナルツアーが開催されました。

１４日（木）、いわき市川前町の「いわきの里鬼ヶ城」で開催された第８分科会には、県内外から２０名近くが参加し、ピザ作り体験とパネルディスカッションが行われました。パネルディスカッションでは、「地域を越えた復興支援グリーン・ツーリズム～そうだ・いわきへ行こう！～」と題して、パネリストの一般社団法人いわき観光まちづくりビューローの平山専務理事、いわき市遠野オートキャンプ場の佐藤場長、浜風商店街久之浜町商工会の根本信一氏、いわきの里鬼ヶ城の根本敏男代表取締役社長、岩手県のＮＰＯ法人遠野山・里・暮らしネットワーク菊池会長が、東洋大学社会学部青木辰司教授をコーディネーターとしてディスカッションを行い、地域の特性を生かしながら地域を超えた連携をしていく必要性があるといった意見が出されました。

（ピザ作り体験[１４日]）

１５日（金）、全体会は、喜多方市の喜多方プラザ文化センターで開催され、県内外から６００名近くが参加しました。各地域分科会報告、「ナニ・コレパリコレ」と題した野良着ファッションショー、パネルディスカッションが行われました。パネルディスカッションでは、いわき地方から(有)とまとランドいわきの元木寛専務がパネリストとして参加してディスカッションを行い、地域とのつながりの重要性や大人のツーリズムへの転換等の意見が出されました。

（野良着ファッションショー[１５日]）

１６日（土）、南相馬方面へのオプショナルツアーは、まず、語り部である安部あきこ氏からバス車窓から臨む沿岸部の被災当時の状況やその後の避難生活について話を伺いました。次に、農家民宿「いちばん星」で地元農産物を使用した昼食をとりながら相双農林事務所十文字企画部長から震災後の相双農林事務所の取り組みについて説明を受け、最後に南相馬ソーラーアグリパークで施設等の見学と取り組みの説明を受けました。

（語り部の案内でバスツアー[１６日]）

今大会を契機に、福島県内でのグリーン・ツーリズムの取り組みが今後いっそう活発に行われていくことが期待されます。

※グリーン・ツーリズム
…農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動。

収穫の喜びを実感
田んぼの学校（赤井小）

１１月２１日（木）、いわき市立赤井小学校（５年生５９名）において、県のふくしまの農育推進事業「田んぼの学校」の第７回目となる「収穫祭」が行われました。今回は、一年を通して「田んぼの学校の先生」としてお世話になった地元協力農家の根本俊男さんを招待し、一緒に収穫の喜びを味わいました。

開会式の中では、根本さんから今年の作柄や苦労したことなどについての講話をいただきました。また、いわき農林事務所の出前講座として、地産地消、食料自給率、米の放射性物質全量全袋検査の説明を行いました。児童は、動画を見ながら出荷される米袋が基準値以下であることを確認する仕組みについて学ぶとともに、国産や地元産を消費することで生産者と消費者の絆が生まれ、省エネルギーにつながることに気づいたようでした。

今回の収穫祭では、新米の美味しさをシンプルに味わおうと「塩おにぎり」と「豚汁」をいただきました。ご飯が炊き上がるまでの間、児童自らが考えたプログラムにより、歌やダンス、お米に関するクイズ大会を行い、根本さんや保護者と共に収穫祭を楽しみました。ご飯が炊きあがり、豚汁の調理も済んだところでいよいよ会食です。元気よく「いただきます！」のあいさつをした児童らは、豚汁もおにぎりもたくさんおかわりをして、新米の美味しさに自然と笑顔になった様子でした。

３学期には最後の活動となる「修了式」を行い、一年間の活動を振り返る発表会で「田んぼの学校」を４年生へ引き継ぐ予定です。

（自分で作ったお米の味はひとしお！）

いわきの農産物をＰＲ
農林水産物キャンペーン

晴天に恵まれた１１月２４日（日）、今年度３回目となる農林水産物ＰＲキャンペーンを実施しました。

これは、県産農林水産物の風評を払拭するために、東日本大震災の直後である平成２３年４月から実施しているもので、８月７日（水）「たいら七夕まつり」、９月２８日（土）道の駅よつくら港「よかっぺ市」に続き、今回は「遠野もみじまつりｉｎ竜神峡」で１１時から、「田人ほっこり祭」で１４時からの実施となりました。

２つのイベントとも恒例行事となっていることから多数の来場者があり、会場の一角に設けられたコーナーで、安全・安心な農林水産物の生産、流通体制を図っている福島県産、特にいわき産の農産物をＰＲしたほか、「食べて応援しよう！」をテーマに、市内で生産されたフルーツトマト、エリンギ、シイタケをプレゼントしました。

準備の段階からプレゼントを待つ行列ができ、家族連れや地元の皆様から、「小さな町でのキャンペーンはありがたい」、「毎年続けてほしい」といった声が聞かれ、用意した農産物は、短時間のうちに配布されました。

地域の実情・特性を生かした形で実施した今年度のキャンペーンは、大震災・余震、津波の被害に遭われた皆様と交流ができ、大変有意義なものとなりました。県では、今後とも、消費者・食産業関係者・農林漁業者の皆様と一体となり、風評の払拭に向けて取り組んでいきますので、県産・いわき産農林水産物を食べて応援してください。

（農産物を食べて応援しよう！）

いわき地域特定家畜伝染病防疫演習

法定伝染病である高病原性鳥インフルエンザ及び口蹄疫は、伝染性が強いため、ひとたび発生すると、畜産農家のみならず地域経済へ甚大な影響を及ぼします。中国等アジア周辺諸国では断続的に発生しており、人や物を介した侵入リスクは、依然高い状況にあります。

渡り鳥の本格的な飛来シーズンを迎え、現在、家畜保健衛生所を中心に、家きん飼養農場への高病原性鳥インフルエンザウイルスの侵入防止対策の強化に努めていますが、万が一発生した場合は、いわき市、関係機関・団体等と連携した速やかな防疫措置を進める必要があります。

このため、１１月２５日（月）、いわき市錦公民館及び勿来体育館において、いわき地域特定家畜伝染病防疫演習を開催しました。

管内での高病原性鳥インフルエンザ発生を想定し、初動防疫に必要な業務と作業の流れ、関係機関の連絡調整等について確認を行うとともに、実際に防疫業務の班を編制して演習を実施しました。殺処分班係を要請された１０名には、受付から検温・血圧測定、検診、防護服着衣、マスク・ゴーグル・長靴の装着など一連の流れと、動力噴霧器で全身消毒、防護服の脱着などを体験していただきました。

演習を通じて、実際の流れを具体的にイメージできて良かった反面、動員体制の明確化、各作業班のチームリーダー育成強化、防疫作業マニュアルの再点検など新たな問題点や課題も再点検できました。また、参加者から演習後に提出いただいたアンケートでは、非常に参考となる意見も多くありました。

今回の演習で判明した問題点・課題については、早急に解決に向けた検討を進め、効果的な防疫体制の整備に努めます。

（【演習】防護服に身を包む殺処分班係）

作業中の事故ゼロへ安全パトロール実施中

１１月２６日（火）、平成２５年度先山ゼロ推進安全巡回指導（安全パトロール）をいわき市三和町の間伐作業現場で実施しました。

林業は、天候や作業現場等の作業環境の影響を受けやすく、他産業に比べ労働災害の発生頻度が高い状況にあり、特に立木の伐採作業中の事故が全体の５割を占めています。そのため、林業における労働災害の防止を目的に、いわき労働基準監督署、林業・木材製造業労働災害防止協会福島県支部の安全衛生指導員及びいわき農林事務所職員等が、現場において適切な安全管理や基本動作が遵守されているかを確認・指導する安全パトロールを年３～４回程度実施しています。

今回は、いわき市森林組合及び常磐林業(株)の間伐作業現場において、伐木造材作業の巡回指導を行いました。現場作業員の間伐木の伐採や玉切り等の状況を確認した後、安全衛生指導員及び労働基準監督署職員等から伐木造材作業での注意事項、かかり木処理、最近の林業労働災害の発生状況、森林内の作業における放射線障害防止対策等について説明し、労働災害防止に向けて注意喚起を行いました。

今後も継続的に巡回指導を実施し、林業労働災害の未然防止に努めてまいります。

（作業中の事故を防ぎましょう）

指導農業士女性会員研修会が開催されました

１１月２８日（木）、福島県指導農業士女性会員研修会が開催されました。この研修会は、県内各地で農業を担う指導農業士の女性会員が一同に会する研修です。震災後は開催されていませんでしたが、いわき市を会場に２年ぶりの開催となり、１７名が参加しました。

始めに、三和町の農家そば屋を会場に、女性会員が農畜産物を加工し直売所等で販売している品物を持ち寄る「一品持ち寄り試食会」を行いました。その中で、持参した商品の加工方法や商品化までの経過等を紹介し合いました。

次の現地研修は、三和町にある「三和町ふれあい市場」と平下神谷にある観光いちご園「アグリパークいわき」の２カ所で行いました。「三和町ふれあい市場」では草野店長から運営方法などについて説明があり、直売所を運営している会員が熱心に質問している場面が見られました。「アグリパークいわき」では指導農業士の鯨岡氏からいちごの栽培と園の経営について説明を受けました。

研修終了後は近況報告会を行い、現在の自分の経営内容とこれからの抱負について、意見を交換しました。県外に避難している会員からは、福島に戻りたいという思いや、放射能の影響で休業している会員からは、今年から米の実証試験栽培をしており再開に向けて動き出しているとの報告がありました。互いの親交を深めるとともに、各会員が福島の復興に向けた決意を新たにする有意義な研修会となりました。

（販売している品物を試食して意見交換）

森林作業道作設に係る現地検討会が開催されました

１２月５日（木）、６日（金）の２日間、森林作業道作設に係る現地検討会が開催されました。この検討会は、放射性物質に汚染された地域での森林作業道作設について、安全対策の再確認や放射性物質が付着した土砂等を下流域等に拡散させない作設技術を向上させることを目的に、森林作業道作設オペレーター研修（放射性物質対処型）の修了者や林野庁及び森林管理署、県の森林作業道担当者を対象に実施されたものです。

初日は、オペレーター研修修了者が作設した森林作業道の現地見学を行い、担当者から説明を受けた後、その安全対策や対処方法等について議論を行いました。

２日目は、（独）森林総合研究所の赤間亮夫氏による放射性物質の森林内での動態等に関する講義を受講し、その後、前日の現地での研修を踏まえた意見交換が行われました。

参加者は、放射性物質に対処した森林作業道作設というこれまでに経験のない課題に対して、現場の施工状況の説明に熱心に耳を傾け、各自の意見や疑問を述べるなど活発な議論、意見交換を行い、作設技術の向上に努めていました。

（真剣な表情で見学する参加者）

森林バスツアーが開催されました

１２月７日（土）、県内の消費者や設計・建築関係者等を対象に、木材生産や製材･加工の現場を見学する森林バスツアーが開催されました。

このツアーは、福島県地域型復興住宅推進協議会と一般社団法人福島県建築士事務所協会の主催、磐城流域いわき地区林業活性化センターの共催で実施され、いわき市のほか福島市や郡山市から約６０名の参加者がバス２台に分乗し各現場を巡りました。

最初に協同組合いわき材加工センター小川工場で製材やログハウス部材の加工の工程を見学し、その後、横浜市の(株)山田構造設計事務所代表の山田氏による大型木造建築に関する講演を聴講しました。

昼食後は、三和町の約５０年生のスギ林において間伐作業を見学しました。伐採木が目の前で地響きをたてて倒れる様を目にした参加者からは感嘆の声があがりました。

続いて、同センター勿来工場に移動し、丸太から柱や板への製材、乾燥、表面仕上げの工程のほか、放射線検査やグレーディングマシンによる強度試験を見学しました。

最後に、クリナップ井上記念体育館で開催された「ふくしまみんなの住宅フェア」を見学して、ツアーは終了しました。

木材が山から生産され、工場での製材加工後、住宅部材になっていく過程を間近で見たツアー参加者は、地域材の利用に対する関心が高まったものと思われます。

（スギ林の間伐を見学しました）

（強度試験の現場を見学しました）

平成２５年度第３回いわきいちごセミナーを開催！

１２月１０日（火）、今年度３回目のいわきいちごセミナーをＪＡいわき市夏井支店で開催しました。参加者はいちご生産者やいちごの新規作付を希望している方たちで、約３０名が参加されました。

今回は、「今がチャンス！いわきいちごの活性化！～流通販売から見たいわきいちごの指定席確保への提言～」をテーマに開催し、講師として(株)平果の鈴木光栄専務取締役をお招きし、世界のいちごの生産状況や他県の出荷状況、流通の視点からブランド化を見据えて産地としてこれから実践していくべきことや、行政、ＪＡへの提言をいただくとともに、いわきいちごを生産する農業者の高齢化や出荷などの課題について生産者と多くの意見が交わされました。

（講師の説明を真剣に聴く参加者）

澤村勘兵衛生誕４００年　～絵画でみる小川江筋～

いわき総合図書館では、１０月１８日（金）から来年１月１８日（土）まで、澤村勘兵衛（さわむら　かんべい）と小川江筋（おがわえすじ）を紹介した企画展を開催しています。

澤村勘兵衛は、1613（慶長18）年、下野国（現在の栃木県）に生まれ、兄と共に上総国佐貫藩主・内藤政長に仕官します。1622（元和8）年、内藤家の磐城平への転封（てんぽう。大名の配置換え）により平に居を移します。郡奉行となった勘兵衛は、領内の干ばつに苦しむ農民を救済しようと小川江筋開削を藩主に進言し、普請奉行として工事に尽力したと伝えられています。

いわき市小川町の取水堰（取入れ口）から四倉町まで、夏井川左岸（北側）の水田約９００haを潤し、市民の飲料水としても使われ、いわき地方発展の基礎となった用水路が「小川江筋」で、現在は磐城小川江筋土地改良区が維持管理しています。

今回の企画展では、勘兵衛を御祭神にまつる澤村神社宮司金賀家に代々伝えられ、江筋約３０㎞の維持管理を目的に描かれた長さ約１５㎜の「小川江筋絵図」が展示され、沿線の歴史を学ぶことができます。この機会に、先人の遺業と農業用用水路が地域に果たす役割などを知っていただきたいと思います。是非、いわき駅前ラトブ５階へ立ち寄ってみてください！

※開館時間等、詳細はいわき総合図書館へ
電話０２４６－２２－５５５２
またはホームページをご覧ください。

（企画展ポスター）

上：（今も昔も変わらず田を潤す江筋
[いわき市平中塩付近]）
下：（現在の取水口[いわき市小川町関場]
寛永時代、住民が地域の安泰と豊作を祈念して水神をまつったのが始まりという大堰神社がある）

食彩ふくしま地産地消推進店のメニューの紹介

地産地消推進日（１月は８日（水））に合わせ、いわき農林事務所に情報提供のあった食彩ふくしま地産地消推進店のメニューを紹介しますので、ぜひご賞味ください。
なお、内容は変更される場合がありますのでご了承ください。
また、営業日（メニューの実施日）については、事前にご確認ください。

◇　いわき食彩館株式会社　スカイストア（平字一町目）
地産地消メニュー：日替わり（注文）弁当、惣菜
説明：いわき、福島県産の安心･安全な食材（1月はダイコン、ハクサイ、ホウレンソウ等）をふんだんに使用しています。

いわき農林事務所からのお知らせ

○ふくしまの最新情報を「ふくしま 新発売。」に掲載していますのでどうぞご利用ください。
http://www.new-fukushima.jp/index.html
１　「がんばろう ふくしま応援店！」一覧
２　イベント情報
３　農林水産物モニタリング情報
(1)モニタリング情報検索
(2)出荷制限等一覧表

「東日本大震災」
及び「原発事故」からの
復興のために！

ふくしまから
はじめよう。
Future From Fukushima.

平成２７年４月より「ふくしまデスティネーションキャンペーン」（ふくしまＤＣ）が開催されます。
ニュース内にも、ロゴが隠れています！

◎　皆様からのご意見･情報をお待ちしております。
福島県いわき農林事務所 企画部 地域農林企画課
〒970-8026　福島県いわき市平字梅本１５番地
（県いわき合同庁舎 3階）
ＴＥＬ (0246)24-6152　ＦＡＸ (0246)24-6196

いわき農林水産ニュース 検索